伝説のマジックナイト対救世主ワタル

A.I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説のマジックナイト対救世主ワタル

【Ｎコード】

Ｎ３０８２Ｂ

【作者名】

Ａ．Ｉ

【あらすじ】

このお話は、ザガートが、放った光のせいで、伝説のマジックナイトのお嬢様方の３人が、なぜか、救世主ワタルが、過去に、活躍した、異世界創界山へと、召還されてしまうというお話である。果たして、マジックナイトのお嬢様方は、セフィーロへ戻ることが出来るのでしょうか？？

プロローグ（前書き）

このお話は、「魔法騎士レイアース」と、「魔神英雄伝ワタル」と、総合で、「ドッキング」という珍しい、形を現すことにしていますので、混乱するかもしれません。

この２つの作品をご存知の人は、おもしろいかもしれません。

では、お嬢様方が、創界山で、どんな
冒険を繰り広げるのか。
ワタルは、この３人の中学生のお姉様方に、どんな対応を取るのかに、密着して下さい。

では、長編になりますので、よろしくお願いします。

プロローグ

ここは、異世界、セフィーロ。

獅堂光、龍咲海、鳳凰寺風の3人は、「伝説のマジックナイト」として、召還されました。

ここで、神官ザガートを、倒す為、旅をしてきたのですが、ザガートのたくらみによって、別の異世界へと、召還されてしまうなんて、一体、誰が想像したのでありましょうか。

まさか、本当に、ありえないことが、起ころうとは。

そう・・・

「伝説のマジックナイト対ザガート」

の戦いが、始まっておりました。

しかし・・・「こうなったら!!この世界から、お前達を、排除してくれるわ!!

ハ〜〜!!!」

そう、最後の、必殺技により、光がパーッと、輝きました。

「ウワ〜!!」光、海、風と、モコナは、光へと、消えてしまいました・・・

さて、ザガートが放った、怪しげな光。これは、「時空の光」と呼ばれる魔法だった。

そこから、彼女達は、セフィーロとは、別世界。
一体、どこへ、飛ばされてしまったのか。

次回へ続く。

プロローグ（後書き）

果たして、伝説のマジックナイトの3人のお嬢様方は、伝説の救世主、戦部ワタルに会うことが出来るのでしょうか？この少年に、会わないとセフィーロに戻れないという最悪の事態となっていきます。

第1話

ここは、別世界「異世界、創界山」。
そう・・7つの虹がかかってる、山だ。
そこへ、獅堂光、龍咲海、鳳凰寺風の3人は、空から落ちてきました。

「キャア～～！！」海は、「ズテ～ン！！」落ちる。
「何だ、何だ！？」光も同時。
「一体、どうしたんでしょう？？」風とモコナが一緒に降りてきました。

こうして、3人は、キョロキョロと、あたりを見回してみますが、感じが違うんだ。

海「どうやら、私達、セフィーロとは、別の世界へ飛ばされたみたいね。」
風「だとしたら、戻る方法を探さなくては・・・」
光「ねえ！海ちゃん！風ちゃん！
向こうにね、小さな家がある！！
行ってみようよ！何もないよりいいよ！」
と、笑顔で指指して言うので、3人は、一緒に行くこととなりました。

ここは、モンジャ村。

モンジャ村の人から、実は、「この世界はね、救世主の伝説があるのよ。」

と、話してくれた人が、山ほどいて、旅立っている最中という話も聞きました。

「じゃあ、その救世主っていう方が、元に戻してくれる方法を何か知ってるかもしれないわ！」海は、笑顔で言いました。

「どんな人なんでしょう？」風。

「さあ・・でも、その人は、旅立っちゃったんだろ？

その、ドアクダーってのを倒す為に。大丈夫なのかな？」心配する、光。

「そうだ！オババなら、救世主のこと、話してくれると思うわ。

そこへ行きなさい。」と、村のお姉さんの案内で、3人は、オババの家へとやってきました。

そこで、光は、「こんにちわ！」と、明るく、笑顔で、オババに話しかけました。

こうして、3人は、とりあえず、お茶をごちそうになりながら、「伝説の救世主様」っていう、お話を聞かせてもらったのでした・・・・・

こうして、全部、自分達の世界のお話も、含めてした後のこと。

「よろしい！おぬし達、いい目をしておる。
なるほど。話はすべて、分かった。
未来から来たお嬢様じゃのう・・」と、お茶を飲みながら、言いました。

気をつけていけよと。

光「私達も追いつこう！
虹をわたって、第2階層ってとこへいけば、きっと、合えるよ！」
海「そうね。どんな人なのかな？かっこいい子かな。あたしの好みのタイプかしら？？」
と、目を輝かせちゃっている海。勇者様って言うくらいだからと、こうごうしい、何か別の想像をしているようだ。

風「まあまあ、海さんったら。
わたくしも、合ってみたいですわ。
一緒に合流させてもらいしょう。
一緒に旅すれば、きっと、何か分るはずですわ。
元に戻れるかもしれません。」

と、言いました。

こうして、3人は、うなずくと、おばあさんに挨拶をして、「ありがとう！！」と、手を振ると、笑顔で、第2階層へと走り出したのでした・・・・

第2話

こうして、光、海、風は、第2階層への虹を渡っていました。
すると、突然、穴が開いて、3人は、「ピュ～」と、落ちて行きました。

海「まったく！この世界はどうなってんのよ！
ま～た、よ～く落ちるんだから！！」

と、スカートを抑えて落ちていました。

風「仕方ないですわ。たぶん、この世界のルールなのですわ。」

と、スカート抑えている。

光「何か、セフィーロと違って、ワクワクするよ。
早く、救世主様ってのに、会ってみたくなっちゃった♪
友達になれたらいいね♪」

と、3人は、それぞれ、穴に落ちて行きました。

さて。

場所が変わり、第2階層。

そう、第2階層は、（1を見られた方は、分るでしょう？）

「アベコベ世界」であった。

マジックナイトさん達は、そこへ、落とされたのでした。

町も、家も、車も、すべてが、さかさまの世界だったのです。
町の人が逆さまに歩いていたので、光が、一番、驚いていた。
そして、彼女も、おもしろがってしまい、同じように逆さまで歩くチャレンジしたけども、
尻もちついて、海に呆れられた。

すべてが、アベコベなのに、3人のお嬢様は、おもしろがっていました。

「町の中の綱は何なのですか？」と、風ちゃんが、町の人にたずねてみました。

「家の中で生活するには、こうやって、綱を使って水を飲むのでさえ、大変なのよ。
逆さまに流れてくるの。やりにくいのよ。
この階層のボスのせいで、こうなっちゃったの。

救世主様が、取り戻してくれるといいんだけど・・
それまでが、大変よ。」と、困ってる様子でした。

風ちゃんは、「それは、困りましたわね。アララ。」と、思ったらしい。
光が、一番、おもしろがっていました。

そして、村の人達から、ボスがいることを、話を聞いて、いきなり、
海ちゃんが、
早く帰りたい為に、切れたんだ。

「そんなの！私達だけで、やっちゃいましょうよ！
ついでに、何ならさ、創界山も、元に、戻しちゃいましょう！
第7階層まで、私達が、その最大の、ドアクダーって人、ワープして、やっちゃおうよ！
その方が、救世主さんも、気が楽ですわ！
後で、お礼言われるに決まってるわよ♪」
と、目を輝かせてしまい、強気で、バ～カなことを、言い出した。
光は、「ダ～メだよ！
この世界のルールが、ちゃんと、あるはずだよ！
まず、調べようよ！そんな、どんな敵なのかを、調べずに、むやみに、戦いを・・
セフィーロの敵より、強かったら、どうするの？」
と、猛烈、反対したんだけども、海ちゃんが、言うことを、聞かない。
光と風は、「いきなり、その、救世主に、会わずに、そんな・・
もう、どうなっても、知らないから～！
この世界で、修行もしてないのに！」
と、やけくそに、言いながらも、ボスと、戦うことにしたのでした・・
魔神で、いきなり、第2階層の、ボスへ乗り込んだのである。

3人は・・・そして・・・
逆に、やられるハメになる。

そこのボスは、ニヤニヤ笑いながら、バ～カにしてる。

「何だ？このみすぼらしい、お嬢様は！
ワタルかと思ってしまったではないか！
この世界の者ではないな？」

と、猛烈バカにしてしまい、

「飛んでけ～！もう一度、修行し治してこ～い！！」

と、黒い、ドクロ魔神・・
ボスの魔神から、大きい風が！！飛び出したんだ。

「うわ～！！」と、3人は、魔神から、降ろされちゃって、そのまま、ピュ～・・・
一発で、やられちゃったのでした。

風さんが、飛ばされながら、スカート抑えながら、「もう！！海さんったら！
ロールプレイングの世界は、頭、使いなさいって私、言ったでしょう？

この話し、救世主様に、ぜひ、会ったら、一度、聞いてもらいましょう！
ワケも分らず、いきなり、ボスへ、飛び込んだのですから・・・
呆れてしまいますわ。きっと・・」と、飛んで行く3人のお嬢様だ

ったのでした・・・

そして。

一方、話が変わって、救世主の方の話しである。

ワタルは、シバラク、ヒミコと一緒に旅をしていました。

すると・・・・??

「あれ!?何だ??何だ!?あれは!!」

ワタルは、驚いて、目を見張る。

空から誰かが、落ちてくるじゃーありませんか!

ワタルは、「何だ??え!?女の子!?

何なんだ、このみすぼらしい、3人のお嬢様方は!?」と、驚いて、

両手を広げます。

「危ない!!お〜い!こっちへ、落ちておいで!!」とワタルは、

手を振って指示します。

「助けてー!」光は、彼の方に、体を向けた。

「人だわ!手招きしてるわ!助けて!」海も同様。

「お願いしますわ。」風も。

「いかん!ワタル!!お嬢さんが、3人もおるぞ!」

シバラクは、「拙者、あの子にしようっと。」

と、ニヤニヤして、海ちゃんの方に向かって、「さあ、おりてこい！王子様の拙者が、受け止めてあげるよ～！青い子ちゃ～ん♪」と、言い出したんだ。

「まったく！先生ったら！じゃあ、僕は、赤い子にしようっと！」
ワタルは、苦笑いしながら、受け止める体制に入る。

ヒミコは、「あちしは、忍法で、あの緑の子を助けるのだ！！」
と、忍法使おうとしたんだけど？？

3人は、あたふたしながら、何とか受け止めようとしますが。

「ズテ～ン！！」

勢いがすごかったのか、3人のお嬢さん達は、ずっこけた。

救世主が、赤い子（光）の、下敷きになる。

「いててて・・・」ワタルは、立ち上がると、そう、彼女のパンツを見てしまい、スカート見て、ビックリして、赤くなってしまう。

「うわわわわ。
やっぱし、お姉さんだったんだ。僕は、てっきり、小学生の女の子じゃないかと。
ちょっと！そこ、どいてくれませんか！いい年、こいで！！
恥かしいな～。」

ワタルは、立ち上がると、怒った顔している。
腕組んで立ち上がっていた。

「イタタタタ・・・」光は、ワタルを見て、ビックリして、よける。
そして、彼女は立ち上がると、スカートについていた、泥を、払った。

そして、一方。マジックナイトさん達はというと。

「いった～い！」海は、そう、シバラク先生の上に、乗っかっていた。

「最高じゃ♪今日は、何といい日じゃ♪
長生きしてよかった♪しかも、お嬢様3人も！」

シバラクは、鼻血出している。

「え！？」海は、下を見ると、驚いて、飛び上がった。

「キャア～～～！！カバの、魔物～～！！」
海は、驚いて、シバラク先生を、カバの魔物と間違えたらしいんだ。

「水の～～！龍～～！！」

シバラク先生をいきなり、水魔法で襲う海ちゃんを、止めたのは、光だった。

「やめて！海ちゃん！この人、敵じゃないみたいだよ！
この少年の仲間ですって！」光は、慌てて止めました。

「仲間！？」海は、「何で、こんなカバが仲間なの！？
そんでもって、このハイカラ少年は何！？」と、指差して、けんか腰だ。

「おい？そういう言い方、ないだろ？僕達に、何か、言うことがあるんじゃないの？
お姉様！」ワタルは、ワザと意地悪っぽく言いました。
「まあ！何よ！生意気なガキ！」海は、食ってかかる。

「なんだと！？」ワタル。「何よ！おこちゃまが！」海は、ワタルの頭をなでる。
「やめてくれ～！」ワタルの頭を悩ませた。

「ワタルより、明らかに、これは、年上じゃのう！
よし！ワシが、今回は、お嬢様と、お話しよう！」

シバラクは、彼女らの側にやってくると、お互いグループに分かれて、自己紹介しようと持ちかけました。

そして、マジックナイト達は、帰る道を探しているということと、一緒に、しばらくの間、仲間に、加えてほしいことも、事情説明を、風ちゃんが、しました。
自分達に、魔神があることも、ワタルに、話しました。

「まあ、どんな魔神かは、後で、話をゆっくり、聞くよ。」ワタル。

ここで、風ちゃんは、「私達、実は、今、ボスと、戦ってきたとこなんですの。
私達にも、魔神が、ありますわ。

それで・・・

魔神で戦ってみましたの。そしたら、見事に、やられてしまいまし

た。
魔神から、降ろされてしまいましたわ。」と、事情を、話しました。
ワタルは、呆れてしまう。
「は～！？いきなり、話も聞かずに、ボスに、乗り込んで、バッカじゃないの！？」
と、大笑いしていた。さすがに・・・話を聞いて。
なるほど。それで、飛ばされたのかと、ワタルは、納得して、爆笑している。
救世主ワタルは、さすがに年上だし、仲間に加えるには、ちょっとと、感じたのでした。
「え～！？よりによって、このお姉様達と！？
やっぱり、やりにくいよ・・」
と、猛烈に、嫌がっている。
「仕方なかろう。このお嬢様方は、事情が、あるんじゃ。
困った時は、お互い様じゃよ。」
シバラク先生は、ワタルと、話しました。
そして、ワタルも、「やれやれ。」仕方ないなと思いながらも、一緒に旅することになりました。
こうして、落ち着いた後、このお姉様達の自己紹介が始まりました。

「ふん！一体、どういうお姉さんだ！？
失礼しちゃうよ！
僕、年は、１０歳なんですけど？小学４年生なの。
元の世界ではね。
君達の場合は、確か、えっと、中２って言うと・・
（年を数えてみる）
１４歳なんでしょ？
ということは！４歳違いか。
その年で、そのかっこうは、きついな。
ね～え、いい年して、マジ、恥かしくない？
ヒロインやってるつもり！？
どこかの、コスプレのお姉さん！？
これなら、ユミちゃんのがかわいいや。
このお姉様達、嫁の貰い手、絶対、ないぞ～。」
猛烈、３人を指差して、笑いながら、バカにする、ワタル。
昔は、そういう時代なのだ。それが、現れている。
「何ですってー！？」ワタルに顔を近づけて怒り出す、海。
「やめなよ！自己紹介終わってから！」光。
「そうだったわ。」海。
「じゃあ、あたしからいくね！

私、獅堂光！中学２年生！よろしくね！
特技は、剣道！」光は笑顔で言いました。

「私、中学２年生。
龍咲海。特技は、フェンシング！」海は、言いました。

「私は、鳳凰寺風と申します。始めまして。
同じく、中学２年生ですわ。
特技は、弓道ですわ。」風も、挨拶しました。

「そして、これは、私達のマスコット、モコナっていうんだ。」
光は、モコナを抱くと、紹介しました。

ヒミコが、「かわいいのだ！」と、モコナともう、仲良くなっていました。

「じゃあ、今度は、こっちだ。」ワタルは、立ち上がると、自己紹介しました。

「僕は、もう分るよね？
変な、コスプレの中学生のおね～さん！
まあ、一応、始めまして。

僕、戦部ワタル。元の世界では、小学４年生です！
救世主です！魔神は、龍神丸に乗ってます！」ワタルは、言いました。

「拙者、剣部シバラクと申す！魔神は、戦神丸じゃ。」シバラクは、挨拶しました。

「あちし、忍び部ヒミコ！１３代目のおかしら様なのだ！」ヒミコ、エッヘンしている。

「え～！？こんな奴が、伝説の救世主～～！？ガキ！？
ガキの勇者なんて、聞いたことないわ！
龍の冠なんて！！

それも、そっちのが、十分、私達より、恥かしいかっこしてるじゃないのよ！
何かが、絶対、間違ってる～～！？」海は、絶叫した。

「まあまあ、海さんったら！」笑い出す、風。

「すごい、こうごうしい、感じのを、想像してたみたい。でも、かわいいし、おもしろい！
あたし、友達になろうっと！」光は、目を輝かせて、笑顔で、言いました。

光は、「よろしくね。」と、笑顔で、ワタルに言いました。

「ああ、よろしく！
君は、いい人みたいだね。

ど～う考えても僕は、このお姉さん！！
さっきから、僕のこと、にらみつけたりで、超、むかつくんですけど！？」

ワタルは、海をなぜか、思い切り、指差している。

「何よ！」顔近づけて怒り出す、海。

「何だよ！？思いっきし、真似してんじゃんか！
それも、シンボルが、僕と同じ、龍神関係なんて！！水なんだろ？
さっき、見ていたぞ。先生に、使った、魔法！
君、魔神は！？さっき、あるって、風さんから、話し聞いたけどさ。
あんの？君は・・・
大体ね！女の子の救世主～なんて、聞いたことないぞ！初めて知った！」
呆れて言う、ワタル。
「あるわよ！私達にも！
魔神、セレスってのがね！」
海は、「水魔神、セレスがあるのよ！後で見せてあげるから！」
と、言い出した。
「私は、ちなみに、魔神は、レイアースだよ！炎神だよ。炎の力だよ！」光。
「私は、ちなみに、魔神は、ウィンダムですわ。空神です。風の力ですわ。」風。
「ふん！明らかに僕達の、真似して！！
完全に、女ヴァージョンじゃないか！
女の子が、あんまし、は～っきし言って、こういうことは、真似してほしくないな。

女の子は、おしとやかで、大人しく、女の子らしくしてれば、は～っきし言って、十分なんだよ！」怒り出す、ワタル。

猛烈、見事に、バカにしちゃってるんだ。

実は、皆さん、お分かりのように、この過去の時代（ワタルの世界）では、女の子が戦うというのは、オテンバ、じゃじゃ馬、そして、あげくの果てに、「ジャジャ馬すぎて、嫁の貰い手がない！」という、そういう、昔ながらの、時代なんだ。

ワタルは、こういう、気の強い女の子が一番、嫌いらしい。←過去時代

「何ですって～！ま～、さっきから、何よ！女をバカにして！これからの未来は、女が主役よ！ピピピのピ～！」顔近づけて、怒る、海。

「何だよ！全部、本当のことじゃないか！女が主役だって！？バッカじゃないの！？
超ワガママお嬢様！

それも、すんごい、きつく、僕には、感じるんだけど？

ヒミコよりも、超ワガママって感じ。
ヒミコの方が、数倍言うこと聞いてくれるし。
ヒミコのが、おりこうだよ！信じられない！

この時代はね、男のが偉いんだよ！プププのプ～！」

同様に、顔近づけて怒る、ワタル。

この2人に、怒りのオ～ラが立ち並ぶ。

「やめなよ！」光。

「うるさいっ！」ワタル・海。

「頼むから。同じ龍神同士、仲良くしてくれ！
同じ、救世主同士みたいなもんじゃろうが！」シバラク。

「ギャハハハ！龍ちゃん、同士の大喧嘩なのだ！」ヒミコは、おもしろがっている。

「僕は、やだね！特に、この龍神関係の海さんだっけ！？気に入らないよ！
一緒に、旅するなんて！！足でまといになりそうだもん！思いっきし！」

ワタルは、指指して言っている。

「んま～んま～」海は、怒りのオーラを発揮している。

「このお姉さんは、僕と近いものがありそうだ。
おもしろいし。このお姉さんもいい。おしとやかだし、
知的って感じがする。何か、役にたちそうだ。よろしくね。
仲良くしよう！」と、ワタルは、笑顔で、光と風を見て言っている。

「あたしは、何なのよ～～！」絶叫している、海。

「あの、バ～カお姉様は、抜きにして、旅しようか！」ワタルは、

「べ～」すると、
光と、風をパーティーに、入れてしまいました。モコナに、ワタルは、笑顔で、
頭を撫でてやりました。

「ヒミコの遊び相手によろしくな。」と。
ヒミコとモコナはすっかり、仲良しに。

こうして、この一行は、第2階層を、元に戻すため、一緒に行くことになりました。

ただ、1人。

今回ハバにされたのは、龍咲海ちゃんでした。

パーティーから、思い切り、離脱して、後から、1人、猛烈、機嫌悪そうに、
腕組んで、ワタルパーティを、思い切り、睨んで、歩いている海。
仲間はずれにされているんだ。おしとやかではないから。というのが、理由らしい。

ワタルは、「何！？君は、さっきから！
来たければ、来れば？反発してないでさ。

お茶入れてくれる～とか、
お菓子出してくれる～とか。

旅の間にさ。家庭的なこと。
いろいろ、やることあんでしょ？

女として、やること、やってくれるなら、
仲間に入れてやってもいいよ。

女らしいことが、何1つ、出来ないくせに。
そんな感じがするもん。君は。
顔がかわいいからとか、美人だからってそういう問題じゃないんだよ～だ。

この時代で、少しは、お茶、お花くらいやってみたら～？
料理もどうせ、出来ないんでしょ？
これが、お茶で、お座敷だったら、すんごい苦手そうだもんね。
足痛くなって、とても、無理そうだ。

少しは、この2人のお姉様を、見習ったら？
おしとやかさがあるじゃん。

特に風さんだっけ。
風さん、いいとこに、お嫁に行けそう！
このお姉さん、男に、モテルでしょ？
風さんを、見習ったら？

光さんも、大丈夫そう！問題は、えっと、海さんだっけ。
海さん、絶対、嫁の貰い手ないな。

うんうん。（腕組んで、うなずいて、納得している。）

この時代で、少し、花嫁修業したらどうだ？

何なら、僕相手に、おしとやかな、対応練習してみる？
僕を未来の彼氏だと思ってさ。

男性のお付き合いの、練習、この時代で、させてあげようか。

何なら、デートしてみる？
絶対、無理だね！反発ばっかりしてんし！
そんなんじゃ、男はよりつかないわな。

そのセフィーロだっけ。

帰る時が来るまでに、僕相手に優しくする、練習してみな。
女として、優しく、対応できないくせに。」

と、態度が、海ちゃんに対してだけ、思い切り、なぜか、冷たい。

「う～わっ！
思い切り、言われてる、言われてる。
すごい、すごい。
海ちゃんったら！
年下に言われてどうすんの？

それも、小学生にまで・・・
しっかりと！

確か、小学４年生だよね？
しっかりしてる。
セフィーロでの行動がそのまま、海ちゃんったら、ここで、ワガママが、現れてる。」

と、光と、風は、ワタルと海のこのやり取りに、
おもしろがっていて、手を叩いて、クスクス笑っていた。

「海ちゃん！ちょうどいいじゃん！
ワタルくんって、結構、かわいいし、おもしろいし、い～い男じゃない？
この時代で、彼の言う通り、大人しいデートの練習してみたら？」
笑いながら、言う、光。

「そうですわ。クレフさんと変わりませんわ。
ここで、ワタルさん相手に、ここは、１つ、花嫁修行させてもらったらいかがかしら？
セフィーロに帰った時、役に立ちますわよ。」笑いながら言う風。

「んま～何よ！！光！風も！
こいつも、こいつで、クソ生意気ね！！
これなら、まだ、アスコットの方が、大人しいし、かわいらしいわ！
かわいくないっ！それでも、伝説の救世主なのかしら？
信じられないっ！」海は、ワタルの顔を妙にのぞきこんでしまって、
喧嘩腰に入る。

「もう！君はさっきから、何なの！？
喧嘩売ってんの？
全部、本当のことじゃん！
僕の顔に、何かついてる？」
ワタルも、同じように腕組んで、彼女の顔をのぞきこんでいる。
あまりにも、睨んでくるので、気になってしまったんだ。

そこから、すでに、喧嘩に突入していました。

「やめなよ！」光。「そうですわ。」風。

「女の子は、女らしくしてなさい！
花嫁修業するんなら、仲間に入れてあげるけどね。
これが、条件だ。

それと、言っておくけど、このパーティーで、セフィーロで、君がしてきた、ワガママし放題は、禁止だかんな！

この時代では、それを学んでもらうよ！
ほんっと、信じられない！
小学生より、超思いっきし、ワガママじゃん！

超スーパーウルトラワガママお嬢様なんじゃないの？
この2人のお姉さんも、相手が大変だね！

この約束を、守らないんなら、仲間に入れてやんない！」

ワタルは、海に「アッカンベ～。」するので、海の中で、何かが、
「プチン！」
と、はじけた。

彼女は、彼の側に近づいてくる。

「何だよ！？」ワタルは、怒った顔して振り向きました。

海ちゃんは、怒った顔して、彼に顔を近づけました。

「女を見事に、バカにした、これは、未来のお姉様からの、お仕置きよ。
あなたの時代では、女が男に従う時代だったかもしれませんわ。
でもね。私達の世界ではね、女の方が、強くなったのよ。
お分かりかしら？女が社会に出る世の中になったのが、私達なの。

あなたの時代ではね。
例えば結婚観とかも、固い時代の、お見合いってのがあったはずよ。
お母さんから話は聞いたから知ってるわ。

でもね。私達の未来ではね、恋愛って言って、女でもね。
恋だろうが、仕事に生きようが、自由の世界なの。
未来では、結婚するのも、独身でいるのも、自由になりますのよ。

それを、よ～く、覚えておくといいわ。
女だってね、やるときゃ、やりますのよ。
過去の伝説の救世主様！

おしとやかで、大人しい女の時代は、もうすぐなくなりますわよ。
つまり、男性より、女性のが大人しい時代はね、なくなるのよ。
その時代もね、もうすぐ、迫ってますわ。

女をあまりに、そうやって、バカにするとね、未来では、こうなりますの。
それを、あなたに、思い切り、教えてあげますわ。
伝説の救世主様！」

と、言うと、彼を、思い切り、片手を挙げた。そして。

「バシン！！」

思い切り、何と、ワタルの頬を、平手打ちしたんだ。
「え～！？普通、そこまで、する！？すご～！？」
と、見ていた、仲間達は、驚いて、唖然。
ワタルは、座り込んで、頬を押さえていた。
シバラク先生は、ワタルを開放し、抱き起こす。
そして。
「アリャリャリャ・・
見事に、コリャ、本気で殴っちゃった。
なるほどのう。時代じゃのう。
お嬢様方は、未来じゃから。
こちらは、過去じゃからのう・・・
女が自由にするそういう時代ではないんじゃ。
我々、シバちゃんの時代ではのう！
昔ながらの、お話を、しよう。
ちゃんとのう、昔はのう、お見合いってのがあったんじゃよ。
確かにまだまだ、ワタルの時代ではそうじゃ。
お嬢様方、申し訳ない。
女があまりに、気が強いとのう。

この世界では、男性に、嫌われてしまうんじゃ。
海殿だっけ。残念ながら、海殿は、それを知らん。
頭に来ても、こればかりは、仕方ないのう。
時代の繁栄とは、恐ろしいものじゃのう！」
と、お嬢様達に、昔の時代の、説明してあげたのでした。
海は、「知らないわよ！かったくるしい！」と、プイしている。
「まあまあ。この時代のルールがあるのですわ。」風は、なだめます。
しかし、海は、「どうしても、やだ！！どうして、こんな年下と！」
と、言うことを聞かない。
光と風は、２人で、なだめる。
「まあまあ！
大人しくしましょう！
この時代では、救世主、ワタルさんに従いましょう！」
と、持ちかけますが海は、それが、ダメらしい。
「冗談じゃないわよ～～！」
海は、空に向かって大声で、叫んだ。
「こっちだって！冗談じゃないよ～～！」

ワタルも、同じようにして、大声で、空に向かって叫んでいる。
2人は、顔突きつけると、「ふん！！」していた。
こうして、お互い様で、無視しながら、旅を始めました。
しているうちに、ワタルは、ダンダンと、あまりの彼女のすごさに、頭に来ます。
それは、なぜかというと？
猛烈納得せず、尚且つ、パーティーに加わっても、あまりの、ヒミコよりも、超、ワガママし放題、おまけに、タカピーで、お嬢様気取りすぎの海に、対して、
ワタルも、さすがに、怒りの爆発の寸前に追い込まれていました。
そう、それは、一番大問題は、宿屋を廻ってのこと。
毎晩のことである。毎晩、こうなるのだ。
これが、一番、困ると、ワタルは、怒っていた。
「野宿ですって！？冗談じゃありませんわ！
お風呂は！？シャワーは！？食事は！？
ベッドは！？ネグリジェは！？どうなってんのよ！？」海。
「ワガママ言うな！宿屋が見つからないんだから！
食べるとこもないし！しょうがないだろ！？
町がないんだから！
今夜はここで、野宿ったら、野宿なの！！
これも、マジックナイトとしての、修行だと思えばいいだろ！？

じゃあ、聞くけど、セフィーロでは、どうしてたわけ！？
この世界来た時ぐらいは、我慢しろ！！」
ワタルは、「イライライラ～」して、怒鳴りつけた。
風は、「仕方ありませんわ。教えてあげましょう。
今回は、モコナハウスを使いましょう。」と。
光は、「モコナ！頼むわね！」
モコナは、「プップ～！」と、叫んだ。
すると、都合のいいことに、「モコナハウス」が出てきた。
光は、ワタルとシバラクに、中を案内しました。
ワタルは、部屋の中を見た瞬間、驚いて、唖然してしまう。
「まったく！お嬢様にも、困ったもんだ。
ホテルみたいじゃんか！
都合のいい、アイテム出しちゃって！！」
ワタル唖然して、呆れてしまう。
「これは、何とまあ・・」シバラクも、唖然しちゃって、何も言えない。
「べ～！入れてあげるなんて、言ったら、大間違いよ！
あんた達だけ、そっちで野宿、やりなさい！
一緒に寝るなんて、まさか、冗談じゃないわ！」

海は、ワタルに、「アッカンベ～」すると、
ワタルとシバラクをむやみに追い出してしまう。

モコナハウスに入ってしまった。

光と、風、そして、今回は、特別で、「ヒミコちゃんも、おいで。」
と、光が、誘って、
一緒に入れてしまいました。
男陣は何と外。

「うわっ！ひどっ！僕達男は、何なんだよ～！
超むかつく！！先生！僕達は、野宿でやろうね！」ワタルは、かなり
頭にきていた。

「拙者は、いつものことじゃから。慣れとるわい。」

シバラクは、早速、野宿を始めたのだった。

こうして、夜を一緒にすごしていたのでした。

そして、ある日のこと。

またしても、海のワガママし放題に、ワタルは、頭に来た。

ワタルは、「こんなんで、ほんっと！信じられん！
よ～く、マジックナイトがつとまるよね！」

と、バカにしている。

「仕方ないでしょ？女ですもの。」海。

「も～う！何なんだよ、このお姉さんは！
もうちょっと、優しく出来ないのかね～。」

と、顔突きつけては、喧嘩が始まる。

シバラクは、「もうよせ！ワタル！時代が違うんじゃから、仕方がないんじゃ。」

と、彼女に、飛びかかろうとした彼を、止めたのだった。

2人は、「ふん！」している。

シバラクは、海のあまりの、本気の怒りの目を、見たので、ワタルに、アドバイスを下した。

「未来のお嬢様は、すごいのう！特にあの海殿！
うわっ！目がこわっ！さっきから、こちらを睨んでおる。
このお嬢さんは、性格、この時代には、ないくらい、相当、きついぞ～。

コリャ、なめてかかると、やばいかもしれん。

もっと、マジにならんと！
ワタル！

この時代と同様で、対応して、いちいち、女だからと、優しくすると、かえって、こういうお嬢様はのう！つけあがられるぞ！

男女関係なく、これは、年の差もすべて関係なくして、本気で行っ

た方がいい！
このお嬢様の相手の場合は、本気でやれ～！
お前がいつも、魔界の者と戦うくらいの本気でやらなければ、こっちがかえって、
危ないことになるかもしれん！新しいやり方で、戦闘方法を、切り替え～い！」

シバラクは、この時、初めて、海ちゃんの怖さを、感じとったという。
ワタルに大声で、叫んで、こう、アドバイスを下したんだけど？

すでに、遅かった。
海は、またしても、つかつかと彼の前にやってきたんだ。
先ほどのやり取りが、相当気に入らないらしい。
猛烈カリカリしている、海。

「バシン！！」突然、無言で、ワタルの頬を叩いた海。

モロに頬を、叩かれてしまった、救世主ワタル。

2回目だ。

ワタルは、「うわっ！」と、平手打ち攻撃で、モロに、ふっとんだ。
座り込んで、頬を押さえているワタル。
怒りで、燃え上がっていた。

シバラクが、「大丈夫か！ワタル！」と、抱き起こそうとしました。

しかし。

ワタルは、シバラクに来るなと止める。
これは、僕と海の真剣勝負だと、言い放った。

ワタルは、決断すると、目が本気に切り替わる。
マジだ。目がだんだんと、戦闘的に切り替わっていく。

「言われなくてもそうするさ！
こうなったら、こっちも、こっちで、新しい時代ってことで！
女の子とはいえ！今までは、女の子が相手だったら、多少手加減はしてきた。けどね。
君の場合は、マジにさせてもらうぞ。

も～う！完全、頭に来たぞ！
よくも、やったな！
こんな経験、初めてだ。」ワタルは、怒って、立ち上がる。

頬は、少し赤くなっていた、ワタル。

彼は、少し赤くなった、頬を片手でさすると、
キッとして、つかつかと、彼女の前にやってきた。

そして、彼女の前に立ちはだかる。
そして、思い切り、睨み付ける。

「いい度胸してんじゃんか！
思い切り、派手に、やってくれるじゃないか！
2回も！

上等だ！結構、効いたぞ。

お返しだ！

同じ龍神関係・・
いや、救世主として、くらってみな！
2回分、倍にしてお返ししてやる！
エイッ！！」

「バシン！！」ワタルの怒りの平手打ち攻撃だ。

彼女を思い切り、倍にして、平手打ちした！

この1発で、2回分と言うのだから、男性的な攻撃である。
力が違うんだ。

ワタル自身も、何かを感じとったんだ。

いい音していた。

仲間は、「え～！？ちょっと！ウッソ～！？」と、唖然して、驚いてしまっている。

この龍神同士の、救世主同士の、大喧嘩は、誰にももはや、止めることが出来なくなってしまっていた。

「キャア！」海は、少しふっとんで、座り込んだ。
後ろ向いて、頬を押さえると、立ち上がる。
キッとして、彼を、激しく、睨みつける。

「何だよ！？こっちは、こっちで、新しい対応させてもらっただけさ。

僕は、やられたから、そのまま、そっくり、お返ししただけ。
年の差なんて、もはや、関係ないさ。
この世界ではね！

これにこりたら、この時代では、大人しくおしとやかにしてることだな！
さっきから、あまりのワガママし放題に僕も、カリカリしてたんだ。
は～きし言って、ヒミコよりも、すごすぎだもん！

さすがの救世主もね。
あんまり、ワガママし放題の女の子には、容赦ないってこと、よく覚えておきな！
これは、僕からのお仕置きだ！」

ワタルは、腕組んで怒って叫びました。
彼女を激しく、にらみつける。

「よくも・・女の顔を、叩きましたわね！
お姉さんの顔を叩いた罪は、いくら伝説の救世主様でもね。
重いわよ！お仕置きですわ！」海は、怒り出すと、また、再び手を思い切り、挙げる。

彼にまた、「バシン！」と、もう一度、思い切り、平手打ちをくらわせる。

「うわっ！また、同じ場所を！やってくれるじゃないか！」

ワタルは、横向いて、再び、頬を押さえた。睨み返すワタル。

ワタルもこれには、さすがに、頭に来た。

また、彼女に、「お返しだ！」と、「バシン！」思い切り、同じ場所を、平手打ち。
海は、「キャア！」思い切り、叩かれて、横向いてる。

またしても、彼を激しく、にらみつけ、「バシン！！」今度は、無言で、彼を思い切り、叩く。ワタルも同時に、激しく彼女をにらみつける。

ワタルは、無言で再び、「バシン！！」と、同じ場所を叩いた。
お互い様の平手打ち決闘となった。
ワタルと海、見事に、大喧嘩だ。

仲間は、あたふた。

「うわ～」と、目を見張って驚いてしまっている。

それぞれで、音が鳴り響く。
お互い様で、怒りをあらわにした。

ワタルは、怒った顔している。
２人共、頬が少し、同じ場所が、赤くなって腫れてた。

見ていた、仲間は、皆様、一時停止で、唖然・・・・

「何だよ。まだ、やる気？
僕はね、やられたから、事実で、やり返しただけ。
これだけでも、ありがたいと思いな。

この時代だったらね、君は、男性に、完全、嫌われてるぞ。
僕達の時代はね、過去の時代。君から見ればな。
女が気が強いと男は、嫌うぞ。

普通、これが、男だったら、僕、完全に飛びかかってるとこだぞ！
女の子だから！このくらいで、勘弁してあげるけどね。
これでも、手加減してるんだよ。」と、言い放った。

「おいおい～女相手に！」と、仲間達は、驚いてしまう。

「それは、こちらのセリフですわ。
飛びかかりたければ、男性と同じ扱いで、男女平等ですわ！

勝手にすれば、いいじゃない？
そんなに、カリカリしてるのでしたら。
無理して抑えることはないですわ。
どうぞ。

ふん！

それも、できないなんて。
よ～言うわ。

やれないくせに！
情けないですわね！

この時代は、固すぎて、ダメね。
男は、女に手出しも出来ないんですわ。
特に美人のお姉さんや、かわいい女性には、それこそ、戦い挑めない時代ですものね。

オホホホホ！

なら、私から、あなたに、挑戦状を、叩きつけますわ。
先ほどの行動といい、もう、許せませんわ。

も～う、頭に来た！救世主ワタル！
あなたの実力が、知りたいわ。

ね～え♪

あたしから、一本、とってみる気ない？

あなたが、そこまで、戦う女の子を猛烈に、バカにするんなら、
一度、本気で、真剣勝負しましょう！
そしたら、伝説の救世主として、認めてあげる。

女の怖さってのを、あなたに、すこ～しだけ、教えてあげますわ。
少し、お仕置きが必要みたいね。

昔のこと、男がえらいなんて、思ったら大間違いだってこと、あなたに教えた方がいいみたいね。

いざ！勝負！！救世主ワタル！」

海は、腕輪から、剣を取り出して、彼の顔に、剣を突きつけると、言いました。

「うわ～ちょっと！？」と、仲間は、驚いて、見つめている。

「えー！？ここで、決闘！？やめなよ！」と、光と、風は、ちょっ

とと、慌てだす。

「おもしろい！！同じ龍神同士の対決か！
僕も、ちょっと、君には、頭に来ていたんだ！
勝負しろ！！これも、いい体験だ！」ワタルは、剣を抜くと、構えだした。

「おいおい！！」シバラクは、血相を変えますが、「いいんだ。
これも、何かの縁さ。君達は、つまり、未来から来たんだろ？
相手は、女の子と言っても、おもしろいじゃん！

言っておくけど、僕、女の子だからって、手加減するつもりはないからな！
君だけはね！！頬をひっぱたいたんだから、ついでに、お返ししてやる！
僕に勝負を挑んできたってことは、つまり、手加減なしでいいってことだろ？

男になめてかかるとね。この世界では、年の差なんて、関係ないんだ。
実力勝負さ。男の本当の怖さを教えてやる！考えなおすんだな！」

ワタルは、怒って、剣を腰から抜くと、構えています。

「あら？過去の救世主様！
ついに、やる気になったのね！？
一本勝負！！どちらかが、破れるか、降参するまで、戦うのよ！

剣の勝負した後、魔神でも、勝負よ！！
小学生だからって、手加減は、いたしませんわ！

女だからって、あまりに、バカにしてますもの。
お仕置きですわ。」海は、ルールを説明した。

「よ～し！！手加減しないからな！覚悟しろよ！
途中で、泣き出しても、遅いからな。」ワタルは、怒って、剣を、
構えています・・・

２人の後ろには、お互いにらみ合いながらの、龍の絵が浮き上がっていました。
シバラクは、「うわ～これは～ワタルの龍と、海殿の、綺麗な龍・・
これは、何と見事な～まさに、龍同士じゃ～」と、驚いて、見張ります。

ここで、伝説の決闘の場となってしまいました。

仲間達は、不安そうに、見つめています。

戦部ワタル対龍咲海！

世紀の、龍神関係同士の対決だ！
男と女の対決である。果たして！
どちらが、勝つのか。
次回へ続く。

第2話（後書き）

同じ、「龍」同士。
戦部ワタル対龍咲海ちゃんの対立だ。
果たして、勝負はどうなるのか？
次回へ続く。

第3話

ワタル対海ちゃんの決闘は、まさに始まろうとしていました。
嵐の風が、ふいていて、まさに、決闘という感じである。
ヒミコは、「同じ、龍ちゃん同士の対決なのだ！ワタル！がんばれ！」
と、飛び上がって応援していた。
「海ちゃん！少しは、手加減してやりなよ！相手は、海ちゃんと同じ龍神関係ったって、
小学生なんだからね！」光。
「無理なさらないでね！」風。
こうして、シバラク先生が、審判をやってくれることになりました。
「では！まず、剣の勝負からじゃ！準備は、いいか？２人共。」
と、構えていました。
ワタルは、彼女をにらみつけています。
海も、同様。バカにしてと、にらみつけている。
この２人の後ろには、龍が現れていた。
まるで、ライバル同士みたいな感じである。
「うわ～まさに、世紀の対決じゃ！」
と、シバラクは、龍が出だしたので、驚いて、目を見張る。

「龍同士の対決なんて！同じ龍でも、少し違うんだね。おもしろい！この勝負どうなるのかな？」光も、少しワクワクしている。

こうして、シバラクの、審判で、「はじめーーー！！」と、叫んだ・・・

と、同時に、突然飛び出したのは、ワタルの方だった。

「ドリャーー！！」ワタルは、剣を思い切り振りかぶった。

海は、ハッとして、フェンシング系の技で、受けに入る。

そして。

「キンキン！！」

２つの剣の音が鳴り響く。

にらみ合うこの２人。

登龍剣とレイピアが、交わる。

猛烈に睨み合っているこの２人。

海が、じゃっかん、ワタルに押されていました。

ワタルは、「やっぱり、女の子なんだね。

さっきまでの威勢はどうした？

怯えてるじゃないか。」と、彼女の首に、剣を突きつける。

海は、「ウッ！？」少し怯えていたものの、彼を激しく、にらみつけていた。

「この！！」海は、ワタルに、蹴り入れた。

「うっ！？」ワタルは、お腹を押さえながらも、攻撃をかわす。
海は、「やあ～！」と、いきなり、フェンシングの体制で、彼を襲いだした。
ワタルは、攻撃をとにかく、かわす。
そりゃもう、岩が崩れるわで、えらいことで、ワタルも攻撃をかわす。
結構、派手な戦闘である。
2人は、いったん、間をおくと、にらみあっている。
ワタルは、笑顔で、驚きの感想を述べた。
剣を構えながら、話しだしたワタル。
「へ～！おかしな、コスプレのお姉さんにしては、やるじゃん！意外だったな。僕を、ここまで、正直、追い詰めるなんてね。世界は、広いもんだね。
ワクワクしてきたかも。」
ワタルは、剣を構えながら、笑顔になる。
まんざらでもないんだなと。
「あたしは、セフィーロで、学んできたわ。」海は、フェンシング系に構えていた。
「フェンシングの構えか。テレビで見たことあるぞ。元の世界でね。君達も、同じようなもんだろ？だけどね。
まだまだ、男の力の方が上なんだってこと、君には、たっぷり、教えたげる！
小学生だからって、なめてかかると、とんでもないことになるって

ことをね！
年の差なんて、関係ないさ！本気で行ってやる！デ～～イ！」
ワタルは、構えると、本気の本気で、海に立ち向かって行った。
シバラク先生は、「これは・・思っていたより、なかなかの、相手じゃぞ！！
なかなか2人共、いい勝負じゃ！男と女の世紀の対決！
拙者、こういうの、ワクワクするのう！
ワタル！！気を抜いてはならん！！」と、笑顔で、叫びました。

ワタルは、「分ってるって。
ちょっと、手強いかも。
少し、マジになっちゃおうかな。

女の子相手に、本当は、やりたくないんだけどね。
状況が状況だから、そろそろ、ケリつけさせてもらうよ！」と、笑顔で、言いました。

海は、少し疲れが出ていた。

「ハアハア・・
正直、あなたが、ここまで、やるなんてね。思わなかったわ。
さすがは、伝説の救世主様ね。
小学生とはいえ、あなどれませんわ。」と、汗かいている、海。

ワタルは、疲れていない。汗もかいていなかった。
子供で、身軽だからというのもあるのだ。

海は、「仕方ありませんわね。

残念だけど、あなたには、これは、ないでしょう？
魔法がないのが、あなたにとっては、致命傷的ですわね。
これで、ノックアウトですわ！

さようなら。救世主ワタル・・・
オホホホホホ！未来の龍の勝ちのようですわね！」と、勝ち誇った笑いと共に、言うと、彼女は、魔法を使う構えを取る。

「魔法か！！」ワタルは、剣を構えていましたが、手放すと、「身軽さを利用して、交わしてやる！」と真剣に、言い出した。

海は、「さあ、それは、どうかしら？」と、手を挙げると・・・ついに、叫んだ。

「水の～～！！龍～～！！」と。

水は、龍のような形になって、ワタルを襲う。

「龍！？これが、魔法か。でも、失敗だね。
僕も、さっき、先生を襲ったあの時見て学習しちゃったんだ。
残念でした～。僕には、悪いけど、通用しないよ。ここを、上手く、使わなきゃ。

（頭を指差す）

これを、追いかけるように、しつこく、操ることは、できないんでしょ？

じゃあ・・失礼♪」ワタルは、笑顔になると、ジャンプした。
そして、彼女の間合いに入り、そのまま、両手で思い切り、押し倒す。
それも、ど真ん中に、入ってきたんだ。
海は、「キャア～！」そのまま、彼に、一瞬、後ろへ、押し倒された。
ワタルが、海の上に乗っかる体制となる。
「くっ・・」海は、離れようと必死。
「させるか！これで、最後だ！」ワタルは、彼女を押さえ込む。
見事に、抑えられてしまう。
ワタルは、彼女の両腕を、押さえながら、言い放った。
「両手を塞げば、魔法は使えない！！
この勝負、僕の勝ちだ！」と。
その間を風がビュ～っと、吹いていきました。
彼を見つめた一瞬、少しだけど、こうごうしさを、何かを感じ取った。
そして、彼の戦闘的な目に対して、やられてしまう。
やっぱり、女の子だ。海は、押し倒されていましたが、首を激しく振りだした。
だんだんと、顔が、赤くなる。
やだ～小学生ったっても、そんなに、見つめないでよ！！

この私が、こんな子供に、惚れかかっちゃうなんて！
海は、顔赤くなってしまう。

海は、「まだ・・勝負は、終わってないわ！！」と、彼を両手で、何とか、押し返した！！
「うわっ！」ワタルは、飛ばされたけども、立ち上がる。

海は、その場に座りこんでしまい、顔赤くなっている。勝負を忘れていた。

そこを、ワタルは、狙う！！

「やっぱりね。女の子なんだね。
この勝負、もらった！！！
このくらいで、赤くなってたら、ま～だ、まだ！だね。
その気持ちがある限り、男性に勝つことは、無理さ。」

ワタルは、笑顔で、叫ぶと、今だ！！

「行け～～！へん玉！！」

と、へん玉を、思い切り、彼女に投げつけました。

「キャア～～！！」

海は、猛烈油断をしてしまい、お腹に当たったり、腕に当たったり、連続攻撃により、「バタッ！」

まさかの気絶。

勝利は、ワタルのものとなったのでした。

「海ちゃん！」光は、走って彼女を解放する。
「海さん！」風は、「癒しの風～！」と、魔法で彼女を回復した。
「これも、魔法！回復か。」ワタルは、目を見張る。

海は、「う～ん。」と、目を開けると、まさか、こんなクソガキにやられるなんてと、
立ち上がる。海は、彼の側にやってくると、笑顔で、片手を出した。

仲間は、「お～」と、目を見張る。

「救世主ワタル。
見事ね。私の負けだわ。

先ほどは、ごめんなさいね。
一緒に、旅しましょう！

改めて、よろしくね。
あなたとの真剣勝負。楽しかったわ。
ありがとう。それから、さっき、叩いてしまったこと、ごめんなさい。」と、
誤りだしました。

「僕の方こそ。
ちょっと、やりすぎた。
叩いたりして、ごめんなさい。

でもね。いや～、なかなか、おもしろい勝負だったよ。

僕の方が、今回は、誤らなきゃいけない。
女だからって、バカにして、ごめんなさい。
まあ、今度の魔神勝負で、パーティーに加えるかどうかは、決めるよ。」
と、ワタルは、半分、認めたのでした。
「後、魔神の勝負が残ってますわ。」海。
「これで、最後の勝負だな！」ワタル。
こうして、2人はうなずくと、それぞれ、魔神を呼び出すことになりました・・・

第3話（後書き）

男と女の名勝負、いかがでしたでしょうか。
ちょっと、意外な・・・

特に、戦部ワタル対龍咲海の対決前の、喧嘩シーン。

男と女の龍神関係をめぐっての、対決ということで、必見かと思います。

大喧嘩の理由は、「男が偉い。」「女が、これからの時代は、主役！」みたいな、言い争いから、発展した世紀の対決になっております。

楽しんで読んで下さい。では。

第４話

こうして、今度は魔神勝負が始まろうとしていました。

「セレス～～！！」剣を掲げて、呼び出した、海は、乗り込み、かっこつけた。

またしても、フェンシングの体制だ。

ワタルは、「魔神も、フェンシングか。

なら、こっちは！」と、剣を抜くと、「龍神丸～～！！」と、叫びました。

こうして、空から舞い降りてくると、「おーう！！」と、かっこつける。

光と風は、唖然していた。「似てるよ！」と・・・海とワタルって・・と、驚いたんだ。

ワタルは、２つの角を掴むと、かっこつけて、舞い降りてきました。

「ずるいぞ！僕、空、飛べないんだ。悪いけど、地上戦勝負にしてくんない？？」

ワタルは、エコーバンバンで、海に言いました。

「そっか。ここは、超、過去の世界だったわ。ごめん、ごめん。

互角にやりましょう！」海は、了解して、降りてきました。

２対の魔神が、着陸しましたが・・・・？？

龍神丸のセレスを見た、反応。
龍神丸の方から、喧嘩を売る始末となった。いがみ合う、２対の魔神対決に、
さすがのワタルも、タジタジ。笑いをこらえている、ワタル。

ワタルは、角を掴みながら、「むかつくなら、勝手にどうぞ。僕、海さん相手にも、同じことしてんだからさ。いいよ！龍神丸！！言いたいことあるなら、言ってやれ！
何なら、スッキリするまでどうぞ。僕も、やったんだからね。」と、「行け行け！」と言っている。

「じゃあ・・早速やらせてもらおう！こいつが、なるほど。
異世界から来た、少女達３人のうちの１人か！このセレス、私は、気に入らない！
まったく！私の真似しおって！！えーい！声まで、真似するな！！」と、怒り出した。

「そなたこそ、声といい、全部、真似してるではないか！
私のパイロットは、海だ！いいぞ～♪
かわいい、こっちは、女の子だからな～♪」セレスの声。

「え！？」海と、ワタルは、「何だ、何だ？声が・・一緒！？」と、驚いて、言い出した。
今度は、魔神同士の大喧嘩が始まった。

「ふん！女の子ったってな！
家は、ワタルが、パイロットだ！！
そちらは、全然、役立たないくせに。

情けない戦いかたと、どうせ、戦闘も
彼女はキャ～キャ～、逃げてんでしょ？」と、龍神丸も、同じようなことを、ぶつけている。

「こっちは、海は、勇敢だ！」セレス。「ホントに～」疑う龍神丸。
「これは、ホント」ワタルは、龍神丸にすべてを、話して、納得させました。
「う～」と、混乱する、龍神丸だったけど。

そして。

「ピピピのピ～！」龍神丸。「プププのプ～！」セレス。

2対の魔神が、顔くっつけ合わせ、「ふん！」したのだった。

「やれやれ。気は、すんだ？そうなの。似ちゃってんだよ。」笑いながら言う、ワタル。
「ワタル！このお姉さんと、絶対、仲良くしたらいかーん！」龍神丸。

「ニヒヒヒ・・魔神同士でも、驚いてるみたい。」笑っているワタル。

「気は、すんだ？似てるでしょ？あの子。」海。
「ふん！海！あいつと仲良くするな！」セレス。

「アララ・・」海は、笑いをこらえていたのでした。

「ふん！！」龍神丸・セレスは、同時に叫ぶと、ワタルと海を、そ

れぞれ、魔神から、おろしてしまった。命令も、聞かずに・・・

「アララ。やっぱし、相性、悪いみたい。」ワタルは、笑いながら、言いました。

「私達が、仲良くなっても、魔神同士が、こんなでは・・・」海も、苦笑いしていました。

こうして、決闘所か、魔神同士の喧嘩が原因により、結果は、ワタルの勝ちとなりました。

「よろしく!!」ワタルパーティーと、マジックナイトパーティーは、握手して、仲良くなりました。

「こんなに、似てるとは!」シバラク笑っていた。ヒミコと一緒に・・・

こうして、第2階層のとりあえず、ボスまで行こうと言い出したので、

最後の所で、帰れる方法が見つかることとなる。

次回へ続く。

第４話（後書き）

この魔神対決なのですが、龍神丸の声と、セレスの声は、何と、皆様、驚きなのですが、同じ声優さんだったんですね。そこから、アレンジしてみました。
違う意味で楽しんで下さい。

第5話

こうして、第2階層の最後のボスまでたどりついた、ワタル一行と、マジックナイト一行は、魔神で、それぞれ、最後の勝負に出た。

シバラクは、「拙者は、おもしろいから、見届けてみようっと。今回は、手助けなしじゃ。

おもしろいかもしれん。お嬢様対ワタルってのも・・」と、笑いながら、戦神丸乗って、見学していた。

「ワタルさん！癒しの風～！」

魔神ウィンダムから、出た魔法により、龍神丸は、回復した。

「私も手助けするわ！水の龍！！」

海も魔神セレスから、魔法で、ボスを撃退する。

「炎の矢～～！！」

光も、魔神レイアースから、魔法でボスを攻撃。

そして、龍神丸は、「今だ！ワタル！！」と、叫んだ。

こうして、最後のとどめ、「必殺！！登龍剣！！」

ワタルは、最後のとどめを決めました。

「やったね！」光、笑顔。「ありがとう！君達のおかげだよ。

これで、第3階層へ、僕達は、登ります。
しっかし～それにしてもね～」
ワタルは、海を見つめては、ゲラゲラ笑い出したのだった。
海も同時に、ゲラゲラ笑っている。「こんなに、似てるなんてね！
！魔神の声が一緒ってのが、おもしろかったわ。」と、2人は、お
互いに、握手しました。

「あっ！あの光は・・！？」海は、指差した。

そう、ついに、戻れるんだ。

龍神丸は、「そうか。光の中に入れば、たぶん、君達は、セフィー
ロっていう場所に戻ることが出来るはずだ。あ～よかった。せいせ
いする・・」と、笑顔で、言いましたが、最後の最後まで、「ふん
！」セレスを見ては、腕組ながら、怒って、無視しながら話してい
た。

「魔神同士は、最後まで、仲悪いみたいだね！
相性、悪いみたい。」ワタルは、笑いながら、また、遊びにおいで
と、
海に笑顔で言いました。

「困ったわね。私達が、友達になれてもね！」海も笑いながら言っ
ていました。

こうして、魔神から、それぞれ、降りてきて・・・
最後の別れの時が来ました。

海は、「ワタルくん！あなたの活躍が、私達の未来に大きく、影響

するんだから、しっかり、ドアクダー、倒しなさいよ！
元祖、救世主様！がんばってね！」と、笑顔で、手を振って言いました。

「私達は、これで、セフィーロに戻ります。いろいろ、ありがとね。」光。
「今回は、おもしろい世界を拝見させてもらいましたわ。
いい勉強させてもらいましたわ。ありがとうございます。」風。

それぞれ、お辞儀をしました。

ただ、ヒミコだけは、モコナとの別れを惜しんでいる様子だった。

ヒミコが、「やだ〜！」と、涙ウルウルで、光に、モコナを返そうとしないので、ワタルが叱る。

「ヒミコ・・（ワタルは、ヒミコの頭を優しく撫でながら、優しく説得する。）
このお姉さんに、返してあげような。
このモコナちゃんはね。

僕達とは、別の世界の生き物なんだよ。
だから、別の世界へ返してあげないと、死んじゃうかもしれないんだよ。」と、
返してあげようねと、ワタルは、優しく、説得しました。

ワタルに抱きついて、泣いているヒミコ。

その代わり、夕飯、たくさん、食べさせてあげるからと、ワタルは、ヒミコと約束したのだった。

こうして、ヒミコは、モコナを、光に返しました。
「ありがとうね。モコナと仲良くしてくれて。」光は、頭を撫でて、お礼を言うと、
ポケットから、キャンディーを取り出し、ヒミコにあげたのでした・・・

こうして、それぞれ、「さようなら!!お元気で、がんばってね!!」

と、光の中へ入りましたが・・・
海は、入る前に、ワタルを気にしていた。
ちょっと、好きになったらしい。惚れちゃったらしい。

「さあ!君も、早く帰るんだ!
閉じないうちに!」ワタルは、おもしろかったよと、お礼言いました・・・
海は、少し、彼を見て、顔が、パ〜っと、赤くなったものの、降りてくると、
突然、彼を抱きしめました。

「え!?ちょ・・ちょっと!?（顔赤くなる）

気持ちは、分るけど、早くしないと!
君だって、ザガートって人を倒さなきゃいけないんでしょ?
お姫様を助けるんでしょ?

セフィーロの平和を取り戻すんだろ?
向こうの世界戻っても、がんばれよ!

僕をここまで、追い詰めれたんだ。
やれるよ！がんばれよ！」ワタルは、笑顔で、言いました。

海は、「ありがとう・・小さな、勇者さん！」と、ワタルの頬にお別れのキスすると、
光の中へ飛び込んだのでした・・・・・・・・・

こうして、光が閉じて、伝説のマジックナイトさんが、戻った後のこと・・・

ワタルは、「ボン！！」

頭から、湯気が出て、顔真っ赤なのだった・・・・・

「もう少し、仲良くなっても、よかったかな。海・・
気になる存在だったな。」と・・・先生やヒミコに話していたのえした・・・

こうして、ワタルは、胸に秘めると、「さあ！僕たちも、マジックナイトのお嬢様に負けないよう、出発だ！！ドアクダーを倒すぞ！！」と、意気込みます。

「お～～～！！」

シバラク・ヒミコ。

こうして、ワタル達は、再び、本来の目的の旅を目指すのでした・・・

さて、マジックナイトのお嬢様たちは、どうなったのか。

次回へ続く。

最終回

こうして、マジックナイトのお嬢様達は、どうなったかというと。
戻ってきて、光は、消えました。

「やった～！戻れた。」光は、笑顔に。
「本来、やっぱり、私達のいる場所ですわ。」風も、一安心。
「あれ？海ちゃん？元気がないよ。どうしたの？」光は、心配そうに、覗き込みます。

「～～」海は、顔赤くなっていた。

「あ！海ちゃん、まさか！
あのかわいい、男の子に、恋しちゃったとか？？」

光は、驚きだした。

「んまあ！相手は、確か、救世主様とはいえ、小学４年生とうかがいましたわ。
クレフさんが知ったら、怒られますわよ。
クレフさんと、ワタルさん。結構いい勝負になりそうですわ・・
どっちが、かっこいいと思うかしら？？」笑いながら、言う、風。

「何よ！悪い！？今は、子供だよ！
あれでも、大人になればね！あの子は、絶対、かっこい～い、男になるわよ！
もしこれが、同じ時代の世代だったら、私達は、恋してたかもしれないわ。うんうん。」海は、顔真っ赤になったまま、プイしていた・

・

「勝手なこと言っちゃって・・

ほんとは、最初は、似たもの同士だったから、むかついていたくせに。」光。

「いいの！どうせ、私達とは、別世界の人！

さっ！私達は、ザガート倒しに出発するわよ！」海は、言いました。

「お～！」光・風。

こうして、3人は、クスクス笑いながら、再び、セフィーロの旅を続けるのでした・・・

（終わり）

仲直りしてからの様子

さて、こうして、第２章～第４章のあの、見事なすごい、大喧嘩の後のこと。
無事に仲直りしました、戦部ワタルと龍咲海。
他の仲間は、もう、すっかり打ち解けて仲良くなっていた様子だった。

シバラク先生は、よく、風ちゃんと話していたのでした。
昔ながらの話や、この時代のルールなどを、話していたのでした。
光は、ヒミコから、おもしろい、忍法見せてもらったり、モコナと遊んでいたり。

光は、「忍法！まんまるお月様！」が、一番、おもしろいと笑っていました。

ヒミコが、「ＨＩＭＩＫＯ」歌を歌ってくれたりで、光は、光で、
「じゃあ、お返しに！
今度は、私達、伝説のマジックナイトが作った歌、聞かせてあげる！」

と、「モコナの絵描き歌」や、「モコナ音頭でプププのプ♪」を歌ってあげたりして、
遊んでいました。こちらは、楽しい歌の披露となっていたんだ。

ワタルは、頭に線が入る。

「あの・・おたくらは、２人して、一体、な～にやってんの！？宴会！？」と・・・

光と、ヒミコは、2人して、「ギャハハハ！」と、チョコマカと、遊んでしまっていた。

「・・・」ワタルは、後ずさりしていた。みんなも、呆れていました。

ただ、パーティーの中でどうしても、ズレているのは、ワタルと海だった。

しかし、この2人は、あの大喧嘩の後、心が少しずつ、変化してきたらしい。

それは・・・

どういうことかというと。

旅している間の話しである。昼間の出来事だ。

毎日こうなる。喧嘩は、していない様子である。

「何！？さっきから？」ワタルは、海の顔を覗き込む。

「いいえ、別に。」彼女は、それだけ言うと、顔赤くなったまま、腕組んで、後ろ向いて、歩き出していた。

ワタルも、ワタルで、頭をかきながら、困りながら、歩いている。背中合わせ。

仲間達は、後ずさりして、驚いていた。それぞれ。

「どういう変化なのかな？海ちゃん。」光。

「さあ。あのものすごい、大喧嘩以来、ずっと、こういう調子ですわ。あの2人。

お互い顔合わせては、背中合わせ。

海さんも、慌しい様子ですし。
ワタルさんは、だいぶ、困ってらっしゃるみたいですわ。」風は、
心配する。

そして、夕方頃のこと。

あまりにも、人に頼ろうとしない、海。

「小学生にだけは、絶対、頼りたくない！
男なんて、将来、いらないのよ！
これからの時代は、女は、独身時代ですわ！」猛烈、言い切る海。

パーティーに加わってもらっても、人に頼らないんだ。

わがままは、ワタルの平手打ちが、相当、効果があったらしく、さすがに、
なくなりました。急に大人しくなった、海。

海から見れば、負けて以来、ワタルが、親よりも、どうやら、怖いらしい。

相手が、男だらけだからというのが、理由らしい。

セフィーロでは、「女、3人だけだったもん！」と、文句タラタラ。

ワタルは、そんな彼女に、不思議そうに目を見張る。
どうして、こんなに、意地張ってんのかな・・？と・・・
心配しているらしい。

ワタルは、風さんから、すべて、海さんについて、事情を聞きました。

「海さんの場合は。」と、結婚観についても、全部、ワタルに、話しました。

風さんは、「海さんはね。あなたと、本当はね、仲良くしたくても、年の差。
これを、猛烈、気にしちゃってるんだということも、全部、話しました。

素直になれないことを、全部話します。
また、元の世界で、「男いらない！結婚したくない！お見合いしたくない！」

って、すごかったことも、話します。男友達もいなかったことも、話しました。
私立中学では、女ばかりでしたから、こういう男性的な、不陰気になれていないことも全部。

風は、ここの世界で、このおかしな、3つの考えを、治してもらいたいと深刻に、ワタルに、話していました。私達だって、結婚に対しては、興味あるのにと、ワタルと話していたのです。

そこで、風は、ついに、ワタルにこのおかしな心理だけ、年関係なく、治してくれと、
助けてほしいことを、頼みました。

「ワタルさん！この世界に、いる間は、あんな子だけど、

精神を心を、入れ替えてあげて。この過去の世界の、仲間とか、人間観とか。
そういうことを、どうぞ、海さんに、思い切り、教えてあげて下さいな。

心の温かさを。
あなたが、男性で、良かったと私達は、真剣に、思ってますわ。

あなたの救世主としての力で、ぜひに、お願いしますわ。
私も、光も、海さんの結婚観とかについては、ちょっと、実は、心配しているんです。」

「あれは、すごいよね。私も心配だよ。
ワタルさん！お願いね！後、よろしく頼むよ！」光も、頼み込んだ。
と、頭を下げたのでした。

「いいよ。ちょっとね。
ここの世界に、君達がいる間、僕達に、任せてもらってい～い？海さんだけど。

僕も、心配だよ。やっぱしね。おかしい。

結婚心理のあまりのなさすぎも、心配だよ。
元の世界で、ご両親、心配なさってない？

ハハ～ん♪なるほどね。
どうして、こんなに、気が強いのか、やっと、分ったぞ。

男性とお付き合いもしたくない。だから、中学も私立。

男性とお付き合いの経験ナシだったか。やっぱしね。

結婚したくない。
完全、思い込み激しいね。それ。

だったら、本当に、男って、信用出来ないかどうか、この時代で、
付き合いの練習することさ。この時代でね。

これも、時代の差なのかな。
残念だけど、その心理はね、僕達の世界では、考えられないよ。やっぱしね。

未来だと、女の子の心理ってね、そうなってしまうんだろうか。
これも、恐ろしいな〜
でもね・・

やっぱり、結婚ってね、した方がいいよ。
家族がなくなってしまうだろ？

じゃあ、子育てとか、出産とか。
海さんは、経験したくないってことか。
それを、言っているってことなんだよ。

この時代では、どうしても、僕から言わせるとね、考えられない。

そうするとね、未来が、子供が、少なくなってしまう。
未来では、そうなってんのかな。

そんな心理で、本当に、いいのかな。
このままでは、やっぱり、いけないよ。海さん。

女の子ってね。
恋することで、綺麗になっていくって、家の母さんも言ってたんだ。
海さんは、こういう、温かい心を、教えられてないのかな。

この過去の創界山で、心の修行した方がいい！
海さんだけ。僕、気がかりで、彼女だけ、セフィーロに、どうしても、返せないな。

何とか、心理を、変えさせなきゃ。救世主として、助けたい。
いや・・先輩としてね！

彼女の心を入れ替えてみるよ。」ワタルは、ちょっと、心配で、気がかりだった。

「風！変なことを全部、ワタルに、言うんじゃないわよ！！」

海は、腕、組んで、怒って歩いていました。

しかし、しばらくして。

海は、歩いていて、ハプニングが起こる。
そう、石につまずいて、転んでしまったんだ。

ワタルは、手を貸そうとしますが、「バシン！」と、跳ね除けられてしまう。

「だから！男性の助けは、必要ないですわ！
ほっといてくれない？」海は、立ち上がります。

「おい？たまには、男を頼れよ。」
ワタルは、海の手を取ると、男として、試してみる。
ぐっと、ひきよせると、顔を覗き込んだ。
海は、だんだん、顔が赤くなるものの、激しく首振る。
混乱しだした。
「やめてよ！優しくしないで！
子供が、こんなことしていいと思ってるの！？
冗談じゃないわ！どこで、一体、そんなことを！
覚えてくるのかしらね！」と、離れて立ち上がった。
「この世界では、年の差は、関係ないの！
風さんから、全部、話しは、聞いたぞ。
ねえ！？男が、苦手なら、何で、赤くなるの！？」ワタル。
「うるさい！」海は、聞く耳、持たない。
「答えて！！」ワタルは、怒鳴る。
「知らない！」海は、叫ぶと、1人、光と風の後ろに隠れました。
シバラクは、「やれやれ。こりゃ、相当じゃ。」と、話していた。
光と風は、「やれやれ。素直じゃないんだから。」と、ため息ついていた。
海は、光と風の後ろで、赤くなっていたのだった・・・
「こら！まだ話は、終わってないぞ！」ワタルは、近づこうとしま

したが、風さんが、
「これ以上は、申し訳ないですわ。ここまでにしてあげて下さい。」
と、首を振って止めました。

こうして、この2人が、心配して、夜になるとどうなるかというと。
打ち解けるまで、毎晩、どうなっていたのか。

海は、モコナハウスの中で、窓からジーッと、シバラクと一緒に座り込んで、腕組んでいるワタルの姿を見て、パーッと自然に顔が赤くなる。

「海ちゃん!?顔赤いよ。あっ!
ひょっとして!?」光は、耳からウサギみたいな耳を出した。

「んまあ!」風も、耳からウサギみたいな耳を出す。

「違う〜!頼むから、変な誤解しないで〜!!
ただ、私はね。あの子の頬を先に、叩いてしまったから、後悔しているだけよ。」

と、海は、顔赤くなったまま、言いました。

「そんなに、反省してるんなら、ワタルに素直に、誤っちゃえばいいのだ!
ワタルは、物分りいいから、素直だし、大丈夫なのだ。」

ヒミコは、モコナとソファに座って、遊んでいます。

風は、笑顔で、彼女の背中に、両手を置くと、笑顔で言いました。
優しく。

「誤りたいのでしょう？あの子に。
仲直りしたいんでしょ？
ねえ、海さん。

毛布と、飲み物と、食べ物くらい、補給してあげたら？
あなたが、やってあげなさい。
仲直りしてらっしゃい。
何なら、ゆっくり、２人で、いろいろなことを、お話するとよろしいですわ。」

と、風は、彼女を外へ出させました。

そして。

一方、野宿していた、ワタルとシバラク先生はというと。

「ワタル！あの海殿！
あの大喧嘩の後、急に、大人しくなったのう！
昼間の態度といい、夕方の態度といい、何かが、おかしいのう！

今度は、あの激しい戦闘後、どうしたんじゃろう？
ワタルちゃんのあの戦闘が、相当、怖かったと見えるのう！
未来ではどうやら、味わえなかったらしいのう！
少しは、男性の怖さを知ったようじゃのう！

ワタルちゃんに、怯えとらんか？
やっぱり、海殿は、女の子じゃのう！」笑いながら言う、シバラク。

「僕ね、海さんから、謝ってくれるのを待っているんだけどね。

全部、向こうが悪いんだから！
向こうから喧嘩売ってきたんだから、僕は、買っただけ。
誤ってこないし。誤れば、僕、許してあげるつもりだけどね。
僕も僕で、話したいことあるしさ。

彼女が、たぶん、気づいてないんだ。

彼女から、話しかけない限り、僕は、一切、対応しないことにするよ。
こういうタイプはね、しばらく、無視するのが、一番さ。
彼女から、素直に、話しかけてきた時は、男として、優しく対応するつもりさ。」

ワタルは、腕組んで言いました。

すると。

「ワタル！噂をすれば！」と、シバラクは、笑顔で、「海殿！こちらで、
一緒に、温まるか？」と、手を挙げて、言いましたが。
海は、何も言わず、つかつかと、食べ物と飲み物、お菓子などを、その場に置くと、逃げるようにして、去って行った。照れくさいらしい。

「アリャ。」シバラクは、笑いをこらえていた。

ワタルは、「これって・・食べ物と飲み物！？毛布まで。僕達の夕食のつもりかな？」

と、立ち上がる。

「ワタルよ！たぶん、海殿は、誤りたくても、誤れないのかもしれんのう！
相手が、年下の男の子だもんだから、女性としての心理でのう！
プライドが、邪魔しとるんじゃよ。

じゃから、素直でない行動が、次から次へと現れるんじゃ。

今度は、あの大喧嘩とは、逆になってしまったのう！

これも、また、困ったもんじゃ！おもしろいっ！海殿！
この際、おぬしの方から、迫って、行ったらどうじゃ？

あれは、たぶん、恋もしたことないとワシは、思うぞ。
一度、何なら、ちょっとした恋を、試してみたら？」

シバラクは、笑いをこらえながら、アドバイスした。

「ダメだ。それじゃ、あの子の為には、ならないよ。
ったく！小学生より、ほんっと！太刀が、悪いんだから。
向こうから、手を出してきたんだからさ。元々はね。」ワタル。

「ワタルちゃんも、厳しいのう！
こりゃ、素直じゃない海殿が、おもしろいっ！

アヤ？また、来たぞ。
おっ！？がんばれ、がんばれ！」

笑いながら、彼女を応援して、言う、シバラク。

海は、木の側で隠れていたけども、
出てきて、誤る所か、小さくなって、ヒミコみたいに、ワタルの側で、チョコマカしている。

ワタルは、「ブチブチブチ～」腕組んで座っていたけども、ついに、切れた。

「あのさ～！ヒミコみたいなことしてないでさ！
言いたいことあるなら、はっきり言えば！？

言っとくけど、今まで、君が全部、悪いんだから、本当に、素直に真面目にちゃんと、謝るまで、僕、絶対、相手しないからな！一緒に、旅だけは、してあげるけどね！

それとこれとは、話は別！」

と、それだけ、ワタルは、言った。

海は、立ち止まると、ワタルの顔を覗き込む。

相当、激しく叩いてしまったことを、猛烈に、あの大喧嘩の後、気にしているらしく、
彼女は、何と今度は、「塗り薬」を、手渡した。
頬がまだ、お互い様で、少し腫れていたんだ。

ワタルは、お礼言おうとしたんだけど？

またしても、「バギューン！」と、超スピードで、木の後ろで隠れ

ちゃった。

ワタルの頭に線が入る。

シバラクは、密かに隠れては、ついに、笑い転げていたのでした。

海は、「ゼエゼエ・・」そう、モコナハウスの中で、汗かいていた。

「海ちゃんったら！」笑いながら、言う光。

「誤れないのか？」ヒミコ。

「誤るってことはね。お嬢様のプライドに反するのよ。

ダメだ。がんばっても、どうしても、誤れないっ！

あのかっこいい、戦闘的な目に、どうしても、やられてしまう。

いくら、小学生とはいえ！この私の女性本能をくすぐるなんて！

恐るべし、戦部ワタル！さすがは、伝説の救世主様ね！

相手は、年下なんだもん！すっごい、プライドが！

相手が、これがね、導師クレフなら、分るの。でもね！

ワタルは、私が、今まで、セフィーロや、元の世界でね、出会った男性とは、

何かが、違う！正直言って、あの子と話すのが、今は、怖いっ！

負けてからかな。怖くなっちゃった。

私達の世界では、こういうワタルくんみたいな子、少ないんですもの！

こんな人に、私、初めて、出会いましたわ。

時代のせい？ううん！違う！
ワタルくんはね、男らしさが、出てるっていうか・・
やっぱり、救世主だからかな？
神々しさが、出てるのよ！彼には！何かがある！」
と、壁にもたれて、息切れしている、海。顔真っ赤だった。
「そんなの！悪いのは、全部、海ちゃんなんだから！
ワタルくんは、何もしてないはずだけど・・？
ちゃんと、真正面向いて、正式に、誤るべき！
あんだけ、ワガママし放題したんだから！
ワタルくんが、あれだけ、怒るのは、当たり前だと思うよ！
ひっぱたかれて当然！
行っておいで！」光は、怒り出す。
「そんなんじゃダメ！
誤ってらっしゃい！
年下とのお付き合いに、慣れる。
これも、マジックナイトとしてのいい、修行ですわ！
あの時は、戦闘後でしたから。
でもね、正式にちゃんと、改めて、誤ることも、必要ですわ。
たまには、２人でゆっくりと、いろいろと、話してらっしゃい。
何なら、一日、あの２人に混じって、野宿体験でも、してくるとい

いですわ。」

風は、彼女の背中を、引っ張ると、「バタン！」と、海は、追い出されてしまった。

「風～！光～！」海は、ダンダン、ドアを叩いている。

「ダーメ！誤るまで、入れてあげないっ！こっちも、仲間に入れてもらったのに、やりにくいんだからね！」と、2人の声がしていました。

さて、1人ぼっちになってしまった、海は、ワタル達のとこへ、向かいました。

木の側から、黙って、ジーッと、再び、見ています。

「アリャ～。」シバラク先生は、笑いながら、先ほどの、様子を見ていたので、可哀想にと感じたんだ。

「追い出されてきおったか。ついに。」

シバラクは、彼女に、こっちおいでと、誘おうとする。

ワタルは、無視してる。座り込んで、腕組んで無視。

それも、シバラクが、相手をするよう、ワタルは、命令を下した。

ワタルは、向こうから話しかけてこない限り、一切、相手しないからと、シバラクに、言い切ってる。

海は、シバラク先生とは、話すんだ。

「いい！私、今日は、泊まるとこあるから！」と、話した。
「は！？泊まる場所って・・」シバラク。

「私ね。小さい頃から、木登り得意なんだ。
だから。木の上で過ごすからいい。

それに、1人で、しばらく、反省したいし、
ほっといて！このこと、ワタルに言うんじゃないわよ！」

海は、言いだすと、登りだしてしまう。

「アワワワワ！」シバラクは、驚いて、ワタルを、呼びに行った。
「あっ！だから！」海は、登りながら言おうとして、シバラクは消えた。

そして、シバラクは、血相変えて戻って来た。
ワタルに事情を話した。

「なんだって！？光と風さんに追い出されてしまって、
泊まる場所がないから、木に登ろうとしてるって！？」

と、立ち上がると、木の側へやってきました。

ワタルは、木を見つめています。

そう、登っていく、海の姿がありました。

「お～い！降りておいで！あぶないって！」ワタルは、下から、叫びました。

「いいの！ついてこないで！！
絶対、ついてこないでよ！！」海は、一度、言い出したら、聞かない。

海は、どんどん、登ると、太い、木の枝に、座り込んだ。

そして、ウルウル、1人だけ、泣いていたんだ。

ワタルは、「・・・」木を見て決断する。

木を手で、触ると、「これなら、登れそうだな。」と、登りだした。

「ワタル！」シバラク。「大丈夫。後は、任せて。」ワタルは、登って行って、姿が見えなくなった。シバラク先生は、黙って、木を見つめながら、待っていることにしました。

お・ま・け♪パート2

こうして、ワタルは、木に登っていった。

すると、泣いていた、海は、枝に座っていたんだけども、彼に気がつく。

「も～う！ついてこないでって行ったでしょ！！」

海は、下向かって叫んでいたんだけども。

「ごめん。もう来ちゃった。」ワタルは、側にやってくると、座りました。

海は、イライライラ。

誤りたくても、どうしても、誤れないらしい。

海は、座っていたんだけど、後ろ向いていた。

腕組んで・・・ワタルは、彼女の頬を見た。

まだ、じゃっかん、腫れているままだ。

ワタルは、どう見ても、こりゃ、向こうから誤る気配は、なさそうだなと感じ取った。

僕も僕で、叩いちゃったわけだし。

そこで、ついに、自分から、攻めることにした。

ワタルは、ポケットから、ヒミコからもらった、万能塗り薬を、出

した。
この塗り薬は、塗ってしまうと、たちどころに、すぐ治る不思議な薬である。

ワタルは、「ねえ？頬・・やっぱり、まだ、腫れてるね。
君の方から、誤るつもりは、ないんだろ？

っていうか、本当は、誤りたくても誤れないんだろ？
そのオーラがね、ものすごく出てるんだけど。
あの時は、ごめんなさい。

ちょっとやりすぎた。
だから、お詫びにさ。手当てさせてくんない？」と、言い出した。

海は、「え！？じょ・・冗談！？」と、離れて座ろうとしたんだけど、
ワタルに、手を掴まれてしまう。

「これはね、ヒミコの万能塗り薬さ。
これを塗れば、すぐ、治せるからさ。」

と、ワタルは、海の頬に、薬を塗ろうとして、取り上げられる。

「待って！あなたは、元から、何も悪くないですもの。
すべて、私が、悪いんですから。
最初は、私にやらせて。」海は、塗り薬を取り上げると、彼を覗き込んだ。

海は、やっと、素直に謝った。

「ごめんなさい。
あの時は、やりすぎましたわ。
今は、猛烈に、後悔してる。」と、ついに、泣き出してしまう。

「もういいよ。
反省してるんでしょ？
なら、もういいじゃない？
明日から、仲良く楽しく皆で、旅しようね！
いちいち、気にしないこと！」ワタルは、笑顔になる。

「ワタル・・
あんたって、意外に軽いわね。
あんだけ、大騒動おこしておいて・・
ワガママし放題したら、普通は・・
あんだけ、しておいて、なぜ、優しくなれるの？
あれだけ、ひどいことしたのに、許してくれるって言うの？」

と、驚く、海。

「だってさ。
いちいち、そんなことで、言い争っていたらさ。
疲れちゃうじゃん！
プラスで切り替えていかないと、最後にはね、病気になるよ。

どうして、君は、そうなるかな？
深くあれこれ、難しく、考えすぎなんだよ。

年関係なく、もっと自然でいいのに。
時には、人と接したり。
男性に、甘えてみたり。
恋したり。

お互い様で、協力したり。

家族の温かさとかさ。
思いやりとか。

確かに力は、強い。これは、認める。僕を、ここまで、追い詰めたんだから。
はっきし言って、驚かせてもらった。

未来の力だけはね。

でもね。

1つだけ、大きい、欠点を言おう。

それはね。「心のあり方」さ。

君達未来の世界では、温かい、優しい心が、かけているのが、欠点だね。
僕達と違ってね。

この世界はね、一度、誤っちゃったらさ。

二度と同じことは、過去のことは、一切、言わない。
流してしまう。

心がすごく、温かいのが、この過去の創界山世界の一番、いい所さ。

僕ね。相手が、敵であっても、ちゃんと反省してさ。
誤ってくれて、悪さをしないんだったら、許してあげてるんだよ。

どんなに、裏切られようが、どういう状況だろうがね。
傷ついたとしてもね。

例えば、過去が、敵だったからとか。どこの敵だったとかね。
心が入れ替えちゃえばね、何も問題ないんだよ。

だからね。僕が、言いたいこと。
過去の自分じゃなくて、今のこの子、今のこの子・・
っていうね。成長を、見届けなきゃ。

それはね、状況と判断力さ。話の流れだよね。

心の温かさだよ。
だから、いじめ問題も、同じことさ。
風さんから、いろいろと、未来の話を、聞かせてもらったよ。

どうやら、未来では、今、子供のいじめ自殺が、多いそうだね。
この話、龍神丸にも、後で、教えてあげようかな。
絶対、話を聞いて、驚くと思う。僕も、信じられないもん。

僕の世界では、考えなられないな。自殺なんてさ。

こういう時代にもし、僕が、未来に行ったらどうなるか、想像してた。

驚かせてもらった。未来の君達の話を聞いてね。
やっぱし、僕は思う。

家庭崩壊や、離婚とかも、心は、ドアクダーと一緒だよ。
僕は、いじめる奴ってね。ウソつく奴も、大嫌いさ！

そういう奴ってね、ドアクダーより、もっと、最低なんだよ。
だってね。そういう心がなければ、救世主には、なれないよ。

勉強も同じ。ついていけない人がいたら、自然と様子を見て、助けてあげる。
大切なのは、戦いもそうだけど、優しい、温かい、広い心さ。
これが、本当、一番、大切なことだよ。

特に君は、同じ龍神関係で、伝説のマジックナイト。

僕と同じような、役目をしているんなら、ここで、温かい、家族のような、広い心を、伝説のマジックナイトとして、学んだ方がいい。

独立とかね。自由とか。自立とか。

それも、大事だけど、その広い心を決して、忘れてはいけないと思う。

元の世界だったら、家族の心。

それにね。やっぱりね・・

まあ、独立・自立も大事だけどさ。
やっぱし、おかしいと思う！

男性は、やっぱりね、戦う、稼ぐ、外で争うもんなんだよ。
女性は、家庭、守る、温かさ、優しさ、愛・・

これを、もう一度ね、よく見直してほしいと僕は思う。

君達は、広い心をもう少し、勉強した方がいい。
君なら、大丈夫だと思うよ。治せるさ。」

ワタルは、笑顔で、海の肩に、そっと優しく両手を置くと、言いました。

彼には、救世主らしさが、あふれていた。

この場で、龍神丸のワタルの話を聞いて、驚いた、声が入る。

「何！？それは、本当か！？
未来では・・
そうか。

子供が、いじめ自殺・・・
私は、始めて知った。

もし、私が、未来へ行けたら、温かい、父親みたいな役割をしてな。
平和後は。カウンセラーやりたい。

強く生きることを、教えてやりたい。
ぜひ、昔ながらの、心を、子供達に、教えてやりたい。」

と、それだけ言って、消えたのだった。

海は、目を見張った。こいつ、ふざけている点もあると思ったけど、言うことは、すごいじゃない。

この私の心を、動かした・・
こいつ、すごい奴かも。

海は、こう思った。改めて、尊敬したのだった。この世界に来てみて、良かったと。
いい勉強になったと思った海だった。

こうして、やっと、この2人は、正式に、仲直りしたのでした。

海は、ワタルの頬に、塗り薬を塗ってあげました。

海は、どうしても、最初は、「いい！あたし、1人でやる！」と、言い出したけども、
「自然に従いなさい！」ワタルの一言で、大人しくなった海。
ワタルは、塗り薬を彼女に塗ってあげたのでした。

海は、うつむいてしまい、顔真っ赤。
心の中では。

「（恥かしい。まさか、こんな小学生に、教えられてしまうなんて！）」

と、思ったのでした。

ワタルは、何かを感じとったのか、

「恥かしいなんて、思っちゃ、ダメだからね！
それに、気がついたんなら、この世界で、大きく心が君の場合は、成長したってこと！

僕達の世界に、来てみてよかったんじゃない？
むしろ、いいことなんだからね！」

と、痛い所をつかれてしまったのだった。

これ以上は、言い返せない海だった。

こうして、無事に仲直りした2人。
握手をしたのでした。

次の日から、パーティーは、絆が、深くなって、上手くいきだしました。
プリキントンも、倒す時、ワタルが助けたり、マジックナイトさんが、力を貸してくれたり。

こうして、仲良くなってきて、モコナハウスでは。
仲良くなった、きっかけを、海は、光と、風に話した。

話を聞いたとたん、２人は、クスクスおもしろがっちゃって、笑い出す２人。

「まさか！小学生に、道徳を教えられるなんて！！
上手く、甘えちゃえば、良かったのに。
この世界ではさ。

海ちゃんったら！最後まで、とうとう、素直になれなかったのね！
ワタルくんに、リードされてどうすんの？
先に、誤られちゃったってわけね。
年下のワタルくんのが、デートの仕方が、上手じゃない！

しっかりしてるわね！
海ちゃんが、デートの仕方を、見習うべし！

ワタルくんが、救世主になれた理由が、分る気がする！
私達の未来では、ワタルくんみたいな子供ってさ、少ないじゃない？
こういう子ってさ、ぜひ、未来に来てもらいたいよね！
海ちゃんさ、年上ってよりは、年下と結婚したら？将来・・
これも、おもしろいかもよ！年離れで、４歳違いとか。
これで、かっこよかったら、最高じゃん♪」

と、光と風に、後で、話をした後、見事、笑われてしまうことになった。

「何なのよ〜〜！」海は、顔赤くなって絶叫していたのでした・・・

一方、ワタル達はワタル達で。おもしろいと笑っていた。

「アリャリャリャ。結構、海殿は、恋の仕方も、誤るのも、下手だったんじゃのう！
海殿らしい！あんなに、綺麗な顔して、モデルさんのようないい体して男性に、もてそうなのにのう！」

シバラクは、海殿が、３人のお嬢様の中で、一番、おもしろいと、笑い出した。
シバラク先生は、「こういう跳ね返り娘も、この時代にいても、悪くないのう！」
と、笑っていたという。

「この世界で、学べることは、彼女にとっては、十分ありそうだね！
でも、優しい所もあるみたいし、１つ言えることは、悪い奴じゃないことは、事実さ。

ただ、もうちょっと、素直になってくれればね。
たぶん、恋もしたことないんだと思う。

精神がね、強すぎちゃってんだろうな。
だから、時には、甘えることも知らない。
頼ることも知らないんだ。

辛いことがあったら、男性に抱きしめてもらうとかね。
そういうことを、知らずに育ってきたんだと思う。

強がっちゃってるもん。意地張って。あまりにもね。

素直に受け止められない。
1人でやってくみたいな、感じが、強くなっちゃってる。
力ではない。心の問題だよ。

彼女はね、心がね。
心を。

この世界でね、ちょっとね、温かさや、優しさを、学んだ方がいい。

セフィーロに、戻れる日が来るまでさ。
男性に対するエチケットとか。
きつい性格とかね。
そういうことをね。

彼女の場合には、十分ここで、女らしさ、かわいらしさ、これを、学んでくれたらいいと思うよ。ワガママは、この世界で、治ったみたいだから。

この時代ではね、女性が、男性に、従う時代だからさ。
やっぱしね。こんなではね、男が守ることが出来なくなる。あまりに、強すぎでさ。

僕達の世界ではね。
だから、ここでね、海さんだけはね、治した方がいい。

たぶん、僕が思うこと。

あんだけ、「超ウルトラスーパーワガママ」だったってことはね。

彼女はね、お嬢様だから、僕みたいにね、彼女の親よりも、ひっぱたいてまで、
真剣に、怒ってくれる人が、セフィーロや、彼女の元の世界ではね、いなかったんだと思うよ。未来では、そういう親が少なくなってるのだろうか。

あんまり、ワガママすると、どうなるかを、知らずに、育ってきたんだと思う。
僕が、教えたのも、良かったかもしれないな。
たぶん、親にも、叩かれたことないんだと思う。

まあ、それだけでも、大きい成長かな！

海さんは、僕と出会ったことで、心の修行したことで、何かが、大きく、変わってきたはずだよ。それが、セフィーロに帰った後、生かされてることを、願いたい。

戦闘だけは、どうも、あの2人のお姉さんより、しっかりしてるから。
向こうでもやれると思うよ！マジックナイトらしさは、出てると思う。
ただ、もうちょっとね。おしとやかさがあってほしいなと思うよ。」

ワタルも、話をした後、未来は、ここまで、来るのか。
恐ろしいねと、笑っていた。

ここまで、しっかり、小学生に、見事に、言われてしまった、海なのでした。

ワタルのが、今回、一枚上手で、しっかりしていました。

モコナハウスでは、モコナハウスで、ゲラゲラ光と風の笑いが飛び交う。
そう、窓がしっかり、開いていたから、ワタルの話が、聞こえてしまったんだ。

「すごいね！ワタルくん！
伝説の救世主ってのが、すごく、分るよ！

これはね、将来ね、絶対、いい旦那さんになれそう！

おもしろかっこいい救世主ってヒミコちゃんから聞いたけどさ、
分る気がするよ！」光は、手を叩いて、笑っている。

「見事に、海さんの負けですわね。ここにいる間は、ワタルさん相手で、十分じゃない？
ワタルさんを、彼氏だと思って、恋の練習でも、させてもらいなさい。

ここで、旅の間、花嫁修業させてもらってから、セフィーロに、帰りましょう！
ちょうどいいと思いますわ。

ここは、ワガママは、通用しないそうですから、海さんにとっては、
創界山は、
ちょうどいい、花嫁修業の場になりそうですわ。」

風、見事に、爆笑して、笑っている。

「んもう〜〜！！」海は、絶叫していたのでした・・・

海は、１人、顔真っ赤になっていたのでした。

こうして、それ以来、どうなったかというと。
次の日から。体制が変わる。

ワタルを旦那さんだと思って、未来の。
旅の間、花嫁修業させてもらっていたのだった。

ワタルの命令は、「お茶買ってきてね！人数分！お弁当と、お菓子と・・・
それから、モコナハウスの掃除！」と、下すのである。

旅の間に、お茶入れてあげたり、お菓子を村で買ってきたり。
お弁当を人数分買ってきたりで、言われたことを、やりこなす海ちゃんにとって、苦しい、日々が続いたのでした。

そう・・・

シバラク先生から見たら、見事に、大笑いだった。

「しかも、指摘されとるし！こりゃ、ちょうど、修行相手に、いいわい！」シバラクは、笑いが止まらなかったという。他のマジックナイトさんは、ワザと手を出しませんでした。

「私達がやっても、ダメですわ。海さんの為になりませんわ。
後は、ワタルさんに海さんをお任せしましょう！」光・風は、ヒミコと、
モコナの面倒を見ていたのでした。

こうして、仲直りして、上手くパーティーは、まとまって、第2階層のボスまで、
無事にたどりついたのでした・・・

（お・し・ま・い）

お・ま・け♪パート2（後書き）

過去と未来の違い。
いかがでしたでしょうか。

仲直りしてからの、旅がどうなったのか、知りたい人も、いるかと思いますので、おまけで、書かせてもらいました。

これで、最終回になります。
読んで下さってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3082b/

伝説のマジックナイト対救世主ワタル

2011年10月3日16時59分発行